

## 〈研究報告〉

# 医療系大学生におけるオンライン短期海外研修を通じた異文化受容、英語への意識およびコミュニケーション・スキルの変化

Changes in Intercultural Acceptance, Attitudes towards Using the English Language, and Communication Skills among Health Sciences University Students: Participation in an Online Short-term Study Abroad Program

松尾まき<sup>1</sup> 朝澤恭子<sup>2</sup> 折元美雪<sup>3</sup> 大堀美樹<sup>1</sup>

1 東京医療保健大学 医療保健学部 看護学科

2 東京医療保健大学 東が丘看護学部 看護学科

3 東京医療保健大学 立川看護学部 看護学科

Maki MATSUO<sup>1</sup>, Kyoko ASAZAWA<sup>2</sup>, Miyuki ORIMOTO<sup>3</sup>, Miki OHORI<sup>1</sup>

1 Division of Nursing, Faculty of Healthcare, Tokyo Healthcare University

2 Division of Nursing, Higashigaoka Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

3 Division of Nursing, Tachikawa Faculty of Nursing, Tokyo Healthcare University

**要 旨：**目的：グローバルな社会変化の中で対人関係を担う医療系大学生において柔軟な考え方ができる人材育成を目指し、オンライン海外研修に参加した学生の研修前後の異文化への受容、英語への意識およびコミュニケーション・スキルの変化を明らかにすることである。

方法：オーストラリアのグリフィス大学の研修に参加した医療系大学生に対して研修前後にオンライン調査を実施し、異文化への受容、英語に関する意識およびコミュニケーション・スキルについて Wilcoxon 符号付き順位検定を用いて評価した。

結果：8名の有効回答を得た。研修前と比較し研修後では、英語によるコミュニケーションの心配が有意に低減し、英語力への自信は有意に向上した ( $p < 0.05$ )。異文化への受容、コミュニケーション・スキルについては変化が認められなかった。

結論：語学に関する側面はオンラインによる短期海外研修でも刺激となり、医療系学生の意識変化につながっていることが示された。

**Abstract：** Objectives: This study aimed to clarify changes in intercultural acceptance, attitudes towards using the English language, and communication skills of health sciences university students who participated in an online short-term study abroad training program. The goal of such training is to develop flexible thinking among health sciences university students, who will handle interpersonal relations in the midst of global social changes.

Method: Health sciences university students who participated in an online short-term study abroad training program at Griffith University in Australia answered online surveys before and after the program to assess their intercultural acceptance, attitudes towards using the English language, and communications skills using the Wilcoxon signed-rank test.

Results: Eight valid responses were obtained. Compared to pre-training, respondents' concerns towards using the English language significantly decreased and their confidence in their English ability significantly increased post-training ( $p < 0.05$ ). No changes were found in their intercultural acceptance or communication skills.

Conclusion: This study shows that language-related aspects are also stimulated by online short-term study abroad training programs, which leads to changes in attitude among health sciences university students.

**キーワード**：オンライン海外研修、異文化受容、英語意識、コミュニケーション・スキル、医療系大学生

**Keywords**：online study abroad program, intercultural acceptance, attitude to English, communication skills, health sciences university students

## I. はじめに

2019年日本の中長期在留外国人数は約262万人、特別永住者数は31万人であり、これらを合わせた在留外国人数は293万人となり、前年末に比べ20万人（7.4%）が増加し過去最高となった<sup>1)</sup>。また2014年に「観光立国実現に向けたアクション・プログラム2014—訪日外国人2000万人時代に向けて—」が観光立国推進閣僚会議で決定され<sup>2)</sup>、2020年には東京オリンピックが控えていたこともあり、インバウンドを中心とした政策課題が掲げられていた<sup>2)</sup>。さらに厚生労働省では外国人患者受入れ体制に関する取り組みの中で、85%の医療機関が言語や意思疎通の問題に負担や不安であると回答している現状を受け、推進事業の一つに医療通訳者やコーディネーターの配置を整備し始め<sup>3)</sup>、「外国人患者受入れのための医療機関向けマニュアル」が更新された<sup>4)</sup>。グローバルな社会変化の中で、医療現場でも異なる文化的背景を持つ他者と関わる機会も多く、対応力に優れた人材が求められている。

これからの社会が抱える医療関連の課題に対し、東京医療保健大学（以下、本学）の国際交流に関する基本方針では、時代の求める豊かな人間性と教養を備え、新しい視点から総合的に探求し解決できる人材の育成を目指している。その一つに2006年から国際交流の一環として海外研修が開始され、毎年30名程度の学生が研修に参加し、行き先に応じたプログラムの中で海外の医療事情や現地での生活を体験する良い機会を得ている。また、キャンパス間の垣根を超えた活動により、他学部との交流を図る機会ともなっている。2018年からは春休み期間の海外研修に加え、夏休み期間にも研修を追加し、学生にとって選択できる機会を増やしてきた。

このように継続した活動に取り組む中で、研修ごとの満足度やプログラム構成に関し、学生に向けた研修後のアンケート調査は実施されてきたものの、海外研修自体が参加した学生に及ぼす影響を明らかにしたこ

とはなかった。グローバル人材育成の推進では、課題として20-30代の海外に対する受容性が低いこと、外国語の苦手意識による留学意向の低下が示されている<sup>5)</sup>。また医療職はチーム医療の推進において、患者やその家族、多種多様な医療スタッフとの円滑なコミュニケーションを取ることが不可欠である<sup>6)</sup>。そこで、本研究では本学の海外研修に参加した学生が、研修を経験することによって異文化に対する態度やコミュニケーション・スキルがどのように変化するかを明らかにしたいと考えた。

短期間のプログラムの中でも海外研修が与えるインパクトに期待し、今後の対人関係職を担う医療系大学生にとって柔軟な考え方ができる人材育成につながる可能性があると思われる。本研究の目的は、オーストラリアのグリフィス大学オンライン海外研修に参加した学生の研修前後の異文化への受容、英語への意識およびコミュニケーション・スキルの変化を明らかにすることである。

## II. 方法

### 1. 用語の定義

異文化：価値観や言語、習慣や行動様式などが親しんでいる文化とは規範・営みの異なる文化（大辞林）

異文化受容：異文化に対して前向きに受け入れる個人の態度

### 2. 研究のデザイン

一群事前事後テストデザインの観察研究とした。

### 3. 対象者

本学の海外研修プログラムで2020年度の第1回目の4日間、第2回目の7日間で実施されたグリフィス大学オンライン研修に参加した学生のうち、研究参加協力が得られた学生を対象とした。なお、倫理審査委員

会による審査の承認後に研究協力を検討したいと申し出のあった学部にも所属する学生は含まれなかった。

#### 4. 調査期間

第1回目は2020年9月および第2回目は2021年3月であった。

#### 5. データ収集方法

##### 1) 海外研修参加者への本研究についての内容の周知

本研修プログラムのコーディネーター兼アドバイザーから研修参加学生に、メールで研究の対象として説明がある旨を連絡していただき、学生のメールアドレスを研究者に周知してよいかの同意を取ったうえで学生の連絡先情報を得た。その後研修参加者には研究目的、方法、倫理的配慮等を記載した研究に関する説明書を研修開始前にメールで配信した。

次に事前の海外研修オリエンテーション日に合わせ、オンラインによる研究説明会を設定し、研究についての概要、方法、質問内容、利益不利益等の詳細を研究補助者より学生へ口頭で説明し、研究者が不在の状況で学生の研究参加への意思を確認し、同意書の提出の依頼をした。

##### 2) 実施方法

調査の方法はオンライン調査とした。同意の得られた研修参加者に対し、配布した説明書に記載のQRコードから研修前と研修後にそれぞれ回答を求めた。

#### 6. 調査内容

調査票の質問内容は基本属性、異文化に関する項目およびコミュニケーション・スキルであった。異文化についての質問は先行研究<sup>7, 8, 9)</sup>および本学の海外研修後の報告書(学生の振り返りエッセイ)を参考に独自で作成した。

##### 1) 個人属性

対象者の属性は性別、年齢、所属の学科、海外研修参加の経験の有無、海外留学経験の有無、海外旅行の経験の有無、外国語検定を受験した経験の有無を調査した。

##### 2) 異文化受容

異文化に対する前向きな態度についての質問は「日本語が話せない外国の人にも関心を寄せる」「多様な考え方があることを認める」など8項目で構成し、全くあてはまらない：1点から、非常にあてはまる：6点の評価とし、合計得点8点から48点の範囲とした。

##### 3) 異文化および語学に対する主観的感覚

主観的な感覚についての質問は、「日本と海外の文

化の違いを学ぶことができると思う」など4項目と「英語によるコミュニケーションに心配がある」の1項目を尋ね、1から10段階の評価とし高い得点ほど非常に当てはまる回答となるようにした。また英語力の自信の程度は自信あり～自信なしの4段階で尋ねた。

##### 4) コミュニケーション・スキル

コミュニケーション・スキルには藤本・大坊<sup>10)</sup>が作成した24項目からなるENDCOREsを用いた。ENDCOREsとは、コミュニケーション・スキルの因子中の表現力と自己主張に共通するENcode・読解力と他者受容に共通するDEcode・自己統制のCOntrol・関係調整のREgulateの頭文字を組み合わせた名称である。この尺度は多面的なコミュニケーション・スキルを体系的に把握でき、3つの基本スキル：自己統制、表現力、読解力と3つの対人スキル：自己主張、他者受容、関係調整の2階層に分け、さらに表出系、反応系、管理系の3系統に整理され、2階層3系統の6つに分かれている。演繹的アプローチにより先行研究より抽出された因子をそれらの関係性から階層構造として整理・統合された尺度であり、信頼性・妥当性が検証されている。質問項目は自己統制「自分の衝動や欲求をうまく抑える」他、表現力は「自分の考えを言葉でうまく表現する」他、読解力は「相手の気持ちを表情から正しく読み取る」他、自己主張は「まわりとは関係なく自分の意見や立場を明らかにする」他、他者受容は「相手の意見や立場に共感する」他、関係調整は「人間関係を第一に考えて行動する」他からなっている。回答は7段階で1点：かなり苦手から7点：かなり得意で評価され、6つのスキルごとに得点数を加算し、4つの質問項目数で除して尺度得点とする。本尺度使用にあたっては尺度開発者の許諾を得た(2020年1月8日)。

#### 7. 解析方法

分析は統計ソフトSPSS Statistics Version26 (IBM, Armonk, NY, USA)を使用した。Shapiro-Wilk検定を行ったところ、データが正規分布に従っていることが確認されず、対象者数も少ないため、前後比較はノンパラメトリック検定を行った。記述統計量を算出後に、各尺度の信頼性と妥当性を検討した。研修前後の異文化受容、コミュニケーション・スキル、語学力に関する意識の変化を検討するため、前後比較はWilcoxon符号付き順位検定を用いた。有意水準は5%とした。

#### 8. 倫理的配慮

本研究は、東京医療保健大学ヒトに関する倫理審査

委員会による審査を受け、承認を得て実施した（承認番号 教32-11 2020年8月3日）。本研究の施設承諾は施設代表者の学長に本研究の趣旨を文書で説明し、承諾書の提出をしていただき施設承諾を得た。研究対象者へは本研究の趣旨をメールでの添付文書および口頭で説明し、研究参加は自由意志によって行われすべての科目の成績に影響は一切ないこと、研究に参加しなくても不利益は被らないこと、研究参加の途中辞退はいつでも可能であり、研究者には個人が特定されないよう番号で確認を行いデータの消去をすることを保証した。データの取り扱いについて保存する記憶媒体はすべてパスワード設定し、研究成果を学術集会等で発表する際は、個人が特定されないよう公表することを約束した。

### Ⅲ. 結果

オンライン研修に参加した学生は全体で23名（1回目、2回目それぞれ18名、5名）であったが、本研究において条件の合う対象学部の合計12名（それぞれ8名、4名）の学生に研究を依頼し、6名、4名が研究参加に同意した。合わせて10名（83.3%）の研究対象者に対し、オンラインで回答可能なQRコード付き調査票を配布し、5部、3部を回収した。回収できた計8部を分析データとして用いた（有効回答率80.0%）。なお、それぞれのオンライン海外研修実施日数が異なっているが、プログラム内容はほぼ同等であること、それぞれ参加者人数が少ないことから合わせて解析を実施した。

#### 1. 対象者の属性

対象者の性別は男性1名（12.5%）、女性7名（87.5%）であり、所属は看護学科7名（87.5%）、医療情報学科1名（12.5%）であった。海外研修参加経験ありが2名（25%）、海外留学経験ありが1名（12.5%）、海外旅行経験ありが5名（62.5%）であった。英語力の自信はまあ自信ありが1名（12.5%）、あまり自信なしが4名（50%）、自信なしが3名（37.5%）であった。外国語検定の受験経験者は7名（87.5%）であった（表1）。

#### 2. 使用尺度の信頼性と妥当性の検討

1) 異文化への受容は、一つの概念を測定していることを仮定し8項目で重みなし最小二乗法、バリマックス回転を用いて因子分析を行った。最尤法、主因子法、プロマックス回転では最適解が得られなかったためである。固有値1以上を基準としたところ、共通性

表1 対象者の属性 (N=8)

項目	n	%	
性別			
男子	1	12.5	
女子	7	87.5	
年齢			
	18	3	37.5
	19	2	25.0
	20	1	12.5
	21	1	12.5
	27	1	12.5
所属			
看護学科	7	87.5	
医療情報	1	12.5	
海外研修参加			
あり	2	25.0	
なし	6	75.0	
海外留学			
あり	1	12.5	
なし	7	87.5	
海外旅行			
あり	5	62.5	
なし	3	37.5	
英語力自信			
まあ自信あり	1	12.5	
あまり自信なし	4	50.0	
自信なし	3	37.5	
外国語検定受験			
あり	7	87.5	
なし	1	12.5	

は0.4以上、2成分の因子寄与率が78.1%で、各項目因子負荷量は、0.42以上が確認され、2因子8項目の妥当性が確認された。Cronbachの $\alpha$ 係数は8項目全体で0.87であり、内的整合性があると判断し、信頼性が確認された（表2）。以上より、本研究においてN=8と少数であるが、異文化受容尺度が確認された。

2) コミュニケーション・スキル尺度については、尺度開発論文で信頼性・妥当性が検証済みであるが、再確認を行った。24項目で重みなし最小二乗法、バリマックス回転を用いて因子分析を行った。固有値1以上を基準としたところ、共通性は0.6以上、5成分の因子寄与率が92.3%で、各項目因子負荷量は、0.30以上が確認され、5因子24項目の妥当性が再確認された。Cronbachの $\alpha$ 係数は24項目全体で0.90であり、内的整合性があると判断し、信頼性が再確認された（表2）。以上より、開発者のデータと相違のある本研究の対象者においてもコミュニケーション・スキル尺度が使用できることを確認した。

#### 3. コミュニケーション・スキルの特徴

対象者のコミュニケーション・スキルの特徴は、自己統制、読解力、他者受容、関係調整スキルが、表現

力、自己主張スキルよりも高い傾向が認められた。最も高得点は他者受容であり、低得点は自己主張スキルであった(図1)。

#### 4. 研修前後の各得点の変化

##### 1) 異文化受容および主観的感觉

異文化への受容に関しては、研修前の中央値39.0[36.0-41.5]、研修後は40.0[34.8-44.5]であり、有意な差はなかった( $p=0.40$ )。その他の主観的感觉についての回答は、「日本の文化を見つめ直す機会となると思う」が、研修前の中央値8.0[5.8-9.0]が研修後には8.5[7.0-10.0]、「自分を見つめ直す機会となると思う」が、研修前後で中央値、四分位範囲に変化はなし、「日本と海外の文化の違いを学ぶことができると思う」が、研修前の中央値9.5[8.3-10.0]が研修後には8.5[8.0-10.0]であり、いずれも有意差はなかった( $p>0.05$ )。「日本と海外の医療や看護の違いを学ぶ機会になると思う」については、研修前の中央値10.0[9.0-10.0]が研修後には9.5[7.3-10.0]であり有意差はなかった( $p>0.22$ )。

##### 2) 語学に関する意識の変化

英語力の自信に関しては、研修前の中央値2.0[1.0-2.0]、研修後は2.5[2.0-3.0]であり、有意な差があった( $p=0.02$ )。「英語によるコミュニケーションに心配がある」ことについては、研修前の中央値7.0[3.5-9.5]が研修後には4.5[3.3-5.0]と有意に減少した( $p=0.04$ )。

##### 3) コミュニケーション・スキル

ENDCOREsに関しては総合得点および下位尺度ごとの得点で前後比較をした。研修前の総合得点では中央値121.0[114.0-145.0]、研修後は128.5[116.5-136.0]であり、有意な差はなかった( $p=0.74$ )。各スキルの前後比較をしたところ、それぞれ自己統制5.4[4.8-

5.8]、5.9[5.1-6.2]、表現力5.0[3.9-5.8]、5.1[4.6-5.3]、解読力5.6[4.4-6.6]、5.9[4.6-6.8]、自己主張4.4[3.7-5.3]、4.8[2.8-5.0]、他者受容6.1[5.8-6.4]、5.8[5.4-6.6]、関係調整5.8[4.9-6.7]、5.6[5.1-6.0]であり、いずれも有意差はなかった( $p>0.05$ ) (表3)。

## IV. 考察

本研究では、オンライン海外研修に参加した医療系大学生を対象に、異文化への受容、英語への意識およびコミュニケーション・スキルが研修前後でどのように変化するかを明らかにすることを目的に調査を実施した。

### 1. 対象者の特徴

本研究対象者は本学の国際交流事業の一環として毎年開催される海外研修の募集から、自発的に研修を申し込んだ参加者である。異文化発達モデルにもとづいた文化的差異に対する志向性の研究では、Bennettによって作成された異文化感受性発達モデルを参考に、山本<sup>11)</sup>が日本における異文化感受性を検討し、文化的差異の主観的経験を明らかにしたうえで、日本人には自文化中心的段階と文化相対的段階のギャップを埋める中継段階が存在することを明らかにした。本研究対象者は海外研修に自ら応募してきており、海外旅行経験者が6割を超え、海外研修参加者や海外留学経験者も含まれていた。これらのことから文化的な違いを意識する機会や経験が多いことが推測され、異文化感受性が比較的発達している参加者であった可能性があり、自文化中心の初期段階より進んだ段階に位置するメンバーから構成されたと考えることができる。

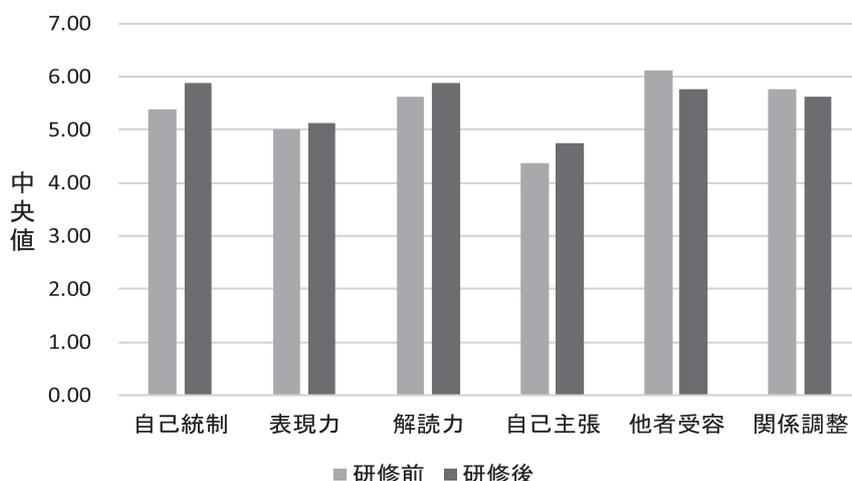


図1 対象者のコミュニケーション・スキルの特徴 (N=8)

表2 尺度の信頼性の検討

尺度	項目数	因子負荷量	負荷量 平方和	Cronbach's $\alpha$
異文化受容尺度	8	0.42-0.95	78.1	0.87
コミュニケーション・スキル尺度	24	0.30-0.95	92.3	0.90

因子分析(重みなし最小二乗法, バリマックス法), 信頼性分析

表3 対象者の各得点における研修前後比 (N=8)

項目	研修前			研修後			p 値
	median	IQR		median	IQR		
異文化受容得点	<b>39.0</b>	36.0	41.5	<b>40.0</b>	34.8	44.5	0.400
日本の文化を見つめ直す機会となると思う	<b>8.0</b>	5.8	9.0	<b>8.5</b>	7.0	10.0	0.230
自分を見つめ直す機会となると思う	<b>9.0</b>	8.0	10.0	<b>9.0</b>	8.0	10.0	1.000
日本と海外の文化の違いを学ぶことができると思う	<b>9.5</b>	8.3	10.0	<b>8.5</b>	8.0	10.0	0.581
日本と海外の医療や看護の違いを学ぶ機会となると思う	<b>10.0</b>	9.0	10.0	<b>9.5</b>	7.3	10.0	0.221
英語力の自信	<b>2.0</b>	1.0	2.0	<b>2.5</b>	2.0	3.0	0.020 *
英語によるコミュニケーションに心配がある	<b>7.0</b>	3.5	9.5	<b>4.5</b>	3.3	5.0	0.041 *
コミュニケーション・スキル総合得点	<b>121.0</b>	114.0	145.0	<b>128.5</b>	116.5	136.0	0.735
自己統制スキル	<b>5.4</b>	4.8	5.8	<b>5.9</b>	5.1	6.2	0.496
表現力スキル	<b>5.0</b>	3.9	5.8	<b>5.1</b>	4.6	5.3	0.566
読解力スキル	<b>5.6</b>	4.4	6.6	<b>5.9</b>	4.6	6.8	0.724
自己主張スキル	<b>4.4</b>	3.7	5.3	<b>4.8</b>	2.8	5.0	0.566
他者受容スキル	<b>6.1</b>	5.8	6.4	<b>5.8</b>	5.4	6.6	0.320
関係調整スキル	<b>5.8</b>	4.9	6.7	<b>5.6</b>	5.1	6.0	0.595

Wilcoxon の符号付き順位検定. \*p<0.05

## 2. 異文化への受容

沼田<sup>8)</sup> は日本人大学生における異文化理解の現状において、多文化共生に関する問題の理解を深めさせる教育実践の重要性を述べている。異文化理解には様々な背景を持つ他者と交流し、多様な視点から物事を捉える異文化理解理想型がある一方で、理解不全型、異文化理解抵抗型など他者に関心を十分に示すことができなかつたり、全く関心を示そうとしないことが報告されている。本研究対象者は、もともと多様性を受け入れる姿勢については関心が高いために、研修前後の変化はなかった可能性がある。一方で、現地海外研修ではホームステイなど異文化に接触することで、考え方の違いや文化の違いを感じたとする報告がある<sup>12)</sup>。オンライン研修ではこのような価値観や習慣、行動様式の相違を現地で体験できないことから、研修前後での異文化受容の変化がなかったともいえる。

異文化を受容することは複雑であるものの、グローバル化への対応の時代から多文化共生の視点<sup>9)</sup> が今後ますます必要となってくるであろう。さらに対人関係職である医療者として、異文化を受け入れる前向きな態度は重要であり、専門・組織および地域での文化的差異を検討すること<sup>11)</sup>、つまり文化ケアの実践、文化・言語に根差したニーズアセスメントや様々な文化的背景の人々の葛藤や苦情を解決できる力<sup>13)</sup> が求

められる。そのためには、海外研修は学生にグローバル化や国際交流に向かう素地を作る絶好の機会を与える<sup>14)</sup> 要素はあるものの、学生の経済的な問題<sup>7)</sup> やコロナ禍で現地研修自体が不可能な現状においてオンラインによる海外研修は取り組みやすく実践的価値がある。今回の対象者は異文化受容に対する明らかな変化は認められなかったものの、異文化に触れあい、経験値を積み上げる点では一定の効果があつたかもしれない。

## 3. 語学に関する意識の変化

海外研修プログラムを実施する上での1つの課題は学生の語学力である<sup>14)</sup>。今回の海外研修への参加は英語力を条件とした選抜式ではなく、学生が研修に参加するかどうかを決める際の1つの不安材料になること<sup>14)</sup> が考えられたが、参加した学生は英語力の自信のなさがネガティブに傾くことなく、研修後に英語力の自信が向上していた。さらに、英語によるコミュニケーションに心配があることについては、研修後に有意に心配が減少していた。語学力の側面については主観的な感覚による評価となり、現地研修の先行研究の結果と比較してみると、看護系大学の短期海外研修においても語学力が向上したと認識する参加者が多いことが報告されており<sup>15)</sup>、本研究対象者の状況を見

でも妥当であると思われる。オンラインでの海外研修という新たな取り組みで、語学の壁、画面越しによるコミュニケーションの壁、ICTスキルの壁など不安要素は重なり合ったが、研修に参加し英語によるコミュニケーションの成功体験が英語力の自信につながった<sup>16)</sup>のであろう。もしくは、英語力の自信の向上が英語によるコミュニケーションの心配を低減させた可能性もある。このことは、外国人と交流した後に「不安を感じなくなった」「話すときは落ち着いている」といった意識変化の報告や<sup>17)</sup>、「緊張せずに自然なコミュニケーションができた」という異文化に順応できたことを経時的に調査した報告<sup>18)</sup>と同様の傾向にある。しかし、これらの結果はいずれも現地滞在期間が3週間という期間に対する回答であり、一概に比較はできない点には注意が必要である。

#### 4. コミュニケーション・スキル

本研究対象者のコミュニケーション・スキルの特徴を示すために、2,184人の大学生を対象としたENDCOREsの調査をした先行研究<sup>19)</sup>と比較したところ、基本スキル系は高い順に読解力、自己統制、表現力であり、対人スキル系は他者受容、関係調整、自己主張ではほぼ同様の傾向であった。また、看護大学生を対象とした先行研究のENDCOREsの得点傾向<sup>20, 21)</sup>とも一致した。今回の研修ではオンラインという直接対面ではない状況でのコミュニケーション・スキルが求められていたが、医療系学生にとって表情、笑顔、アイコンタクト、相槌など非言語的スキルを用いてのコミュニケーションは重要である<sup>14)</sup>。今回は研修前後で各スキルが向上したわけではなかったが、オンライン研修は積極的アプローチを発揮するには好環境であり、表現力スキルなどは向上していく可能性もうかがえる。

本研究対象者はオンライン海外研修でも英語によるコミュニケーションの心配が低減し、英語力の自信につながっており、さらには自信がコミュニケーション・スキルの向上へと結びつく可能性があり、そのプロセスを明らかにすることでグローバル化に対応した人材の育成につながることが期待できる。

#### V. 今後の課題

本研究は対象者が8名と少なく、オンラインによる海外研修前後での異文化への受容、語学やコミュニケーション・スキルの変化として一般化するには限界がある。今後対象人数を増やして評価していくことや、海外研修不参加者や現地海外研修参加者との比較検討

が求められる。

また、いくつかの異文化に関する評価尺度（異文化感受性発達尺度<sup>11)</sup>、多文化コミュニケーション能力測定尺度<sup>9)</sup>、異文化理解尺度<sup>8)</sup>）が実在している。しかしながら、医療系大学生に特有の異文化理解やコミュニケーション力に関しての内容となっているかについては疑問が残り、先行研究を参考にしながら今回は改めて異文化受容に関する質問項目を作成した。一定の信頼性および妥当性は確認できたが、対象者人数が少数であることから、さらなる検討の必要性がある。

最後に、医療職を目指す学生がダイバーシティ時代を駆け抜けるためには、価値観や言語、習慣や行動様式など異文化を受容し、その中でもコミュニケーション能力が発揮できる対応力に優れた人材育成に向けて、短期間やオンラインによる海外研修でも可能なプログラムを検討し続けることが課題である。

#### VI. 結論

本学のオンライン海外研修により、英語によるコミュニケーションの心配が低減され、英語力への自信の向上が明らかとなった。異文化への受容、コミュニケーション・スキルについては研修前後で変化が認められなかった。学生の語学に関する側面は、短期間のオンラインによる海外研修でも刺激となり、良い意識変化につながっていることが示された。

#### 謝辞

本研究にご協力くださいました参加学生の皆様に心より感謝申し上げます。

なお本研究は令和2年度東京医療保健大学学科特別研究費の助成を受けて実施した。

#### 引用文献

- 1) 法務省. 令和令和元年末現在における在留外国人数について（アクセス日2020年11月11日）  
[https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04\\_00003.html](https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/nyuukokukanri04_00003.html)
- 2) 矢ヶ崎紀子. 観光政策の課題～競争力のある観光産業を目指して. サービスロジー 2015; 1(4): 28-35.
- 3) 厚生労働省. 外国人患者受け入れ体制に関する厚生労働省の取組 2018.
- 4) 北川雄光, 佐野武, 八木洋, 他. 外国人患者の受入れ環境整備に関する研究. 外国人患者受け入れのための医療機関向けマニュアル（改訂第2.0版）2020.

- 5) 文部科学省高等教育局. グローバル化に対応した人材育成と大学改革. 2013. (アクセス日2021年7月2日) [https://junba.org/images/junba2013photo/slide0200\\_mext.pdf](https://junba.org/images/junba2013photo/slide0200_mext.pdf)
- 6) 厚生労働省. チーム医療の推進について (チーム医療の推進に関する検討会 報告書) 2010. (アクセス日2021年7月2日) <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0319-9a.pdf>
- 7) 三原博光, 日高隆好, 國定美香, 金井秀作. 大学における短期海外研修を通して国際交流の実践とその成果. 県立広島大学保健福祉学部誌 2017; 17(1): 59-64.
- 8) 沼田潤. 日本人大学生における異文化理解の現状. 人間環境学研究 2012; 10(2): 55-63.
- 9) 宮本律子, 松岡洋子. 多文化コミュニケーション能力測定尺度作成の試み. 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要 2000; 22: 99-106.
- 10) 藤本学, 大坊郁夫. コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究 2007; 15(3): 347-361.
- 11) 山本志都. 文化的差異の認知—異文化感受性発達モデルに基づく日本的観点からの記述—. 多文化関係学 2014; 11: 67-86.
- 12) 森久子, 鈴木寿摩. 本学看護学生における異文化体験を通してのコミュニケーション能力と英語学習意欲. 日本赤十字豊田看護大学紀要 2014; 9(1): 71-79.
- 13) 野地有子. 病院と看護の国際化に向けた文化対応能力の評価—国内病院調査の中間報告—. 日本看護評価学会誌 2015; 5(2): 74-78.
- 14) 日高隆好. 看護学生を対象とする海外短期研修の評価と成果. 人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌 2016; 17(1): 95-106.
- 15) 加藤譲. 看護系大学における短期海外研修の現状と課題. 石川看護雑誌 2020; 17: 1-10.
- 16) 香月毅史, 荒井俣子. 看護学生の短期海外研修における英語学習に関する意識調査. 上武大学看護学部紀要 2009; 5(1): 12-18.
- 17) 徳井厚子. 短期語学研修におけるコミュニケーション意識とイメージの変化. 信州大学教育学部紀要 2002; 107: 25-33.
- 18) 川内規会. 大学生の異文化適応と心理的不安の変化に関する研究. 青森県立保健大学雑誌 2006; 7(1): 37-44.
- 19) 藤本学. コミュニケーション・スキルの実践的研究に向けたENDCOREモデルの実証的・概念的検討. 日本パーソナリティ心理学会 2013; 22(2): 156-167.
- 20) 藤本学, 島村美香, 小山記代子, 河野朋美, 幸史子. 看護学科初年次生の基本的コミュニケーション・スキルの類型論的特徴—ENDCORE sを用いたスキル・タイプの判定法を通して—. 日本看護学教育学会誌 2019; 28(3): 13-25.
- 21) 荒木善光, 戸渡洋子, 中村京子. 看護学生のコミュニケーション・スキルとそのスキルを活用する重要度・自信度との関連. 熊本保健科学大学研究誌 2019; 16: 95-103.